名古屋「南寺町」における熱田との境界的性格について —橘町妙善寺を素材として—

THE RELATIONSHIP BETWEEN NAGOYA AND ATSUTA

As seen in the example of Myozen-ji temple in Tachibana-cho

岩本 馨*

Kaoru IWAMOTO

The purpose of this paper is to consider the relationship between *Nagoya* and *Atsuta* by analyzing *Myozen-ji* temple in *Tachibana-cho*, which was located at the south end of "Gojoka". The main contents of this paper are as follows.

- a) *Myozen-ji* temple gradually expanded its temple grounds in order to expand its rental dwelling business. Temple grounds also provided spaces for amusement such as performing arts.
- b) The development of *Myozen-ji* temple was parallel to the activation of the intermediate area between *Nagoya* and *Atsuta*.

Keywords: *Nagoya*, *Atsuta*, *Myozen-ji temple*, *temple grounds*, *performing art*

名古屋、熱田、妙善寺、境内、芝居

1. はじめに

本稿は名古屋橘町にある日蓮宗寺院、妙善寺に関する史料である「妙善寺諸事扣」¹⁾を分析し、そこから同寺を含む「南寺町」²⁾を名古屋城下町の周縁としてよりもむしろ、名古屋と熱田というふたつの都市の境界として再検討することを試みるものである。

はじめに妙善寺の立地する橘町、また「南寺町」の性格について簡単に述べておきたい。茨志麻氏が指摘されているように³⁾、開府当初の名古屋城下町は城を中心とする同心円構造をとっていた。すなわ

【図1】名古屋城下町の構造(高橋康夫他編『図集 日本都市史』(東京大学出版会、1993年)pp. 166-167所収図に加筆)

ち、中央に名古屋城が西国大名を抑える軍事的象徴としてそびえ、その周りを有力家臣団の屋敷が取り囲む。中心市街は「碁盤割」とよばれ面的に割り出された町人地で、その外側に一般の武家地が広がる。また城下の南・東には寺町が形成され端部を劃していた。すなわち「南寺町」はこの城下の同心円構造における最も周縁的な位置におかれていたのである(〔図1〕参照)。

開府当初からの「碁盤割」市街地に比べるとこの「南寺町」一帯の開発は遅れ、2代藩主徳川光友によってようやく寛文4(1664)年に本町通沿いの市街地が開かれる。橘町もこの時に開設され、古鉄・古道具商売を特権とする「町中」⁴⁾として成立したのである⁵⁾。ただその当初の景観は、「千本松原」という古名⁶⁾から考えても城下の周縁、ないし場末とよぶにふさわしい鄙びたものであったと見るべきだろう。

しかし、このように都市的繁栄から疎外された場末の地であった「南寺町」一帯は、18世紀に入ると一転、盛り場として都市の繁栄を演出する場へと変わっていく。その下地となったのは2代藩主徳川光友による寛文5(1665)年の橘町への芝居興行免許⁷⁾という都市振興策であり、それは享保16(1731)年に7代藩主となった徳川宗春による盛り場の積極的な育成策により一層花開いた。これに加え、「南寺町」一帯の盛り場化をもたらした大きな要因として考えられるのが名古屋の南に接する熱田という都市の存在である。熱田は熱田神宮の門前

* 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻
大学院生・修士(工学)

Graduate Student, Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Univ. of Tokyo,
M. Eng.

町、また水陸交通の要衝として全国的な重要性を有していた都市であり、名古屋はこれを取り込むことで単なる地方城下町の枠組みを超えた都市へと成長することとなるのである。

こうした視点から橘町、また「南寺町」一带を見直してみると、それは城下の周縁としてよりも、名古屋・熱田の境界として浮かび上がってくるはずだ。そこで本稿では橘町の妙善寺という寺院を事例として、名古屋「南寺町」という地域のもつ熱田との境界的な性格について考察することにしたい。

2. 妙善寺の成立

妙善寺は橘町に立地する日蓮宗寺院で、七面山と号した。まず、この寺の創建の経緯について、元文5(1740)年に妙善寺が茶屋長以に差し出した由緒書から窺ってみたい(傍線部および()内引用者、以下同様)。

- ① 一、当寺七面宮者、^(1680年)延宝八夏五月瑞龍院大納言様御腫物御悩被為遊、依之茶屋長以抽丹精潔斎仕候而、御祈禱之本尊七面大明神之尊像を自彫刻仕、御祈禱之修驗者妙光院日行数日之間執行申上候処、(中略)其後遂日御平癒被為遊候。右御祈禱靈驗之趣達上聞候処、御感悦之餘り尊像を御城へ被為迎候而、大納言様并御簾中方御拝覧被遊候。其時長以申上候者、此靈像を在家二安置仕候事多恐奉存候、拙者下屋鋪を寺地と改鎮座仕、永々當御国御安全・御国主様并御家門様方御武運長久之御祈禱申上候様仕度旨、則如願被為仰付候(後略)⁸⁾

ここでは尾張藩2代藩主光友の病気が、茶屋長以(尾張藩御用商人中島家)自刻の七面大明神像の靈驗により治癒したことをきっかけに、茶屋家の「下屋鋪」が寺地に改められたことが述べられている。これを額面通り事実として受け取ることは危険ではあるが、これが妙善寺と茶屋家、尾張藩とのつながりを強調する意図のもとに記されているという点は注意されるべきだろう。そこで注目されるのが、上で「御祈禱之修驗者」として見える妙光院日行という僧についてである。以下に「妙善寺歴代」(文政3(1820)年)における記述を示す(〔〕内は原註、以下同様)。

- ② 式世妙光院日行
情妙寺開山、等覚院日富弟子、^(1652年)承応元壬辰、情妙寺入寺。^(1680年)延宝八庚申、^(1682年)隠居、天和二壬戌秋、清涼庵(茶屋下屋鋪之時之名)移ル。此時明神末末森ヨリ此二遷座。同三癸亥三月式十八日、寺号拝領。茶屋隆是居宅之儘門之向之座鋪二明神ヲ奉安置。^(1685年)貞享二乙丑三月十八日、寂。在住六年。〔三年八末森、三年八当寺〕⁹⁾

これによると、日行はもと情妙寺の僧(三世住職¹⁰⁾)であり、隠居後に「末森」¹¹⁾に、その後茶屋家の「下屋鋪」に移り、この時に七面大明神も遷座したらしい。情妙寺は茶屋長以により創建された名古屋城下の日蓮宗寺院であり¹²⁾、当初「清涼庵」は情妙寺住職の隠棲の場として用いられていたようである¹³⁾。ここからも妙善寺の創建に際し茶屋家が重要な役割を果たしていたことを窺うことができるだろう。また、この史料によると妙善寺の寺号拝領は天和3(1683)年となるが、「茶屋隆是居宅之儘」との記述を見ると、当初の姿は町屋敷がそのまま転用されたものであったと見るべきであろう。

貞享2年に日行が死去すると後継として学林という僧が入るが、彼の代に「茶屋ヨリ手伝、門前ヲ切縮、三軒之借家二仕切、古ル木ヲ以三間梁五間之庫裡ヲ建」¹⁴⁾てたといい、また次の日諒の代には「座敷、庫裡の西に引直シ」¹⁵⁾たほか、元禄9(1696)年に三間四面の七面堂の建

設が行われ、寺としての体裁が次第に整ってきたようである。特に七面堂の建立にあたって茶屋長以は藩主光友から材木を¹⁶⁾、千代姫から白銀10枚を¹⁷⁾それぞれ拝領した上、町中・在郷からの奉加も許可されており¹⁸⁾、藩による援助も少なくなかったようである。

さて、以下に示す「元禄九年子九月家屋敷御改之節指上候写シ」により当時の妙善寺の規模について確認しておこう。

- ③ 覚
屋敷表拾貳間口 裏へ貳拾間 茶屋長固扣
内
表六間口は借家三軒二仕置申候
表六間口内 老間は門
五間は高壁寺人共二
右屋鋪・借家共二先年茶屋長固扣二而御座候処、当寺へ寄附仕度奉存候旨、
今度御願仕候様二被仰渡候二付御届申上候。被為仰付被下候ハ、難有可奉存候。已上
^(1696年)元禄九年子九月 京妙願寺末寺 日蓮宗 橘町 妙善寺
御奉行所¹⁹⁾

これによると創建当初の妙善寺境内は間口12間・奥行20間の規模を有しており、橘町通りに面して6間が借家、1間が門、5間が「高壁寺人共二」(先述の「三間梁五間之庫裡」に相当か)となっていたことが分かる。また、これらが「茶屋長固扣」であったという記載にも注目したい。先述史料①・②では「下屋鋪」と表現されていることからすると、ここでの「扣」とは、茶屋家が本邸(城下茶屋町)とは別に所持していた屋敷をさすものと考えられる(補註)。これがこの年に²⁰⁾寺地として寄附されたことで、妙善寺は正式に「家持」²¹⁾となったのである。

3. 妙善寺の境内地拡大

史料③で見たように妙善寺の当初の境内規模は240坪であった。これは寺としては狭かったのか、その後妙善寺は奥への境内地拡大を志向することとなる。以下に示すのはその第一歩として正徳3(1713)年に提出された願書である。

- ④ 奉願御事
当寺之儀、三拾貳年以前主^(1682年)戊辰、瑞龍院様并御家内様方為御祈禱、茶屋長以御願申上一寺二取立、七面堂を建立仕候。右以由緒、先年瑞龍院様御真筆之御額頂戴仕、則七面堂二掛置、永代無退転上之様方御祈禱相動申候。当寺境内坪数貳百四拾坪、年貢地二而御座候。右境内八愛智郡日置村氏神八幡社地之内二而御座候二付、扣主熱田社人大原織太夫方へ年々貢差出シ申候。然処、右七面堂之西、高塀際より漸老間程間御座候而地子家老軒有之、日置村孫四郎と申者罷在候。右堂へ間近ク、殊御太切之御額、堂内二懸置申事二候得は、別而火之元寺々用心甚以無心元、氣之遣仕候。依之右之地子屋鋪東西八間余・南北貳拾八間余、都合坪数百九拾六坪之所當寺へ借地致、年貢地主方へ差出シ、地子家ヲ潰シ空地二致、外ヶ輪高塀ヲ懸ケ、只今迄之寺内ト一所二仕置申度奉願候。則別紙二絵図仕差上申候。右願之場所も日置村八幡社地之内二而御座候二付、扣主織太夫へ申談候処二、拙僧願之通二納得仕候。尤地子家主孫四郎へも不及難儀申候様二相對仕候。并日置村百姓中、当町内之者共ハ勿論、大旦那茶屋長曾方へも右之趣委細申通候処二、各不殘納得仕、何方二少も遮障無御座候間、願之通被仰付被下候ハ、難有可奉存候。已上
正徳三年巳九月 橘町 日蓮宗 妙善寺²²⁾

この願書において妙善寺は光友真筆の額²³⁾を守るということを目として境内西側の224坪²⁴⁾の敷地を借添地することを願い出てい

る。交渉は成立し、正徳4年12月の証文には妙善寺が大原織太夫に本金10両を支払い、以後利息として年1両ずつを納入する旨の記載が見える²⁵⁾。ここで重要なのは従来の敷地もこの借添地とともに日置八幡の社地にあり、これを「扣」²⁶⁾えている熱田社人の大原織太夫²⁷⁾に年貢を納入していたという点である。『那古野府城志』によればこの大原織太夫は日置八幡のみならず同村山王社・白山社・山神社²⁸⁾、また前津小林村春日社²⁹⁾も「持(分)」としており、彼はこれらの社地に対しても年貢徴収権を有していたと推察される。ここからは熱田社人による名古屋南郊への経済面・教線面での勢力拡大³⁰⁾を窺うことができるが、これに対して妙善寺が借添地による日置八幡社地への侵蝕をはかっていることは、熱田に対する名古屋の攻勢の表れと見ることができるだろう。

妙善寺による日置八幡への侵食はさらに続き、寛延2(1749)年には「境内七面堂裏之方二堂一字建立仕、右鬼子母神安置仕度奉存候所、地畧狭御座候」ことを理由として再び「熱田大原織太夫扣愛知郡日置村氏神八幡宮之社地之内、南北式拾八間・東西五間通り地子年貢相対を以指出、借添」することを願ひ出ている³¹⁾。要求は受け入れられ、これにより妙善寺の境内坪数は604(=240+224+140)坪にまで拡大した。このように妙善寺の度々の要求がすんなりと受け入れられている事実から、我々は「大旦那」(史料④)としての茶屋家、またその背後にある藩との関係をまたしても窺うことができる。

このような妙善寺の境内地拡大には別の狙いもあったようである。翌寛延3年に妙善寺が提出した願書を見ると、妙善寺は寛延2年の借添地を機に、町並みにあった庫裏と客殿(ともに5間×6間)³²⁾の裏手への移転を企図していることが分かる³³⁾。妙善寺の表間口は12間で、史料③で見たように、うち6間分が既に借家(本町通り沿いであることから町家形式か)として使用されていたが、この移転により明いた5間分に門前町屋が建設された可能性は高いと思われる。すなわち妙善寺の日置八幡からの借添地による境内地拡張は門前町屋経営拡大の一環としても捉えることができるのではないかな。

妙善寺の勢力拡大志向はこれにとどまらなかった。以下に示すのはおそらく同年と推定される、妙善寺から寺社奉行所下役人衆の半田・小出宛に提出された願書である。

⑤ 当寺西並に日置村扣八幡御座候。只今預り宮守熱田大原織太夫二御座候。幸寺内並之事二御座候間、村方・預り宮守相対之上可成儀二御座候ハ、拙寺預り二仕度奉存候。尤八幡社地二付、地子地も御座候而、宮守受納致来候間、村方・預り宮守納得之上、謝礼金指遣可申奉存候。右之様子村方并織太夫双方対談可仕儀二御座候得共、彼是間違之品も無覺東御座候得は、何卒御奉行所御下役人衆中より御内談被成下候様二仕度奉願候。故障も無御座納得仕候ハ、法華勧請之八幡宮と相改、御繁昌御座候様二仕度奉存候

(寛延3年力)
九月

妙善寺

半田小平治様

小出半四郎様³⁴⁾

ここで妙善寺が願ひ出ているのは、名目的には日置八幡を「拙寺預り」としたいということであるが、実質的には「謝礼金」を支払うことで「地子地」に対する権利、つまり年貢徴収権を買得したいということの意味する。換言すればそれは日置八幡社地に対する一種の領主権の移行要求であったと見なせるだろう。ここで注意されるべきは日置八幡の「扣」の主体が④で言われている大原織太夫ではなく日置

村となっており、一方織太夫は「預り宮守」とされているという点である。推測するに、これは日置八幡を村方の「扣」として記述することで織太夫、そして妙善寺は(一時的に)その権利を「預」っているに過ぎない、という強引とも言える解釈によって、自らの要求の正当性を論じようとしたものではないか³⁵⁾。むしろ、そこでは実質的に「扣主」としての権利の(半恒久的な)移行が企図されていたはずであるし、「法華勧請之八幡宮と相改」という記述からは、「預り宮守」の立場を利用して日置八幡の氏子を宗教面からも掌握しようとする志向を窺うことができる。結局、後年の『名古屋市史』社寺編の妙善寺および日置八幡の記事³⁶⁾を見ても法華勧請となった旨の記述はなく、計画は失敗に終わったと見られるが、ここには妙善寺の飽くなき勢力拡大志向とともに、熱田に対するいわば経済的・宗教的な侵蝕志向をも読み取ることができるだろう。

4. 妙善寺境内と芝居興行

前節では日置八幡社地という熱田社人の「既得権益」に対する妙善寺の攻勢、という事例から名古屋の熱田に対する侵蝕志向を考察したが、この問題を次に芝居興行という側面から検討することにした。ここで注目するのは『尾陽戯場事始』(慶長期から元文期に至るまでの尾張の芝居興行を記録したもの。天明2(1782)年成立、以下『事始』と略す)の妙善寺に関する記事である。ここには「小野川千之介座芝居之図」として[図2]に示す挿絵が掲載されている³⁷⁾が、これは鳥

【図2】「小野川千之介芝居之図」

居に「七面宮」とあることから妙善寺の境内を描いたものと判断できる(史料①参照)。注目すべきはその詞書で、そこには「当御境内の芝居場は今の玄関前、庭のあたりにて南向也、此境内は近年西北に添地出来て大に広がり芝居共至て手広く成たる也」とある。ここでいう「西北に添地」とは先述した日置八幡からの借添地³⁸⁾のことに他ならず、妙善寺の境内地の拡大志向は門前町屋経営のみならず、境内における芝居拡張、すなわち盛り場形成とも密接にかかわるものだったことがここから窺える。『事始』記載の芝居興行の記事としては享保16(1731)年11月10日から、翌17年2月朔日からの小野川千之助一座の「狂言芝居」、同年11月23日からの品川金蔵一座の「子供狂言芝居」が見える。また、徳川宗春の時代における名古屋の繁栄を描いた『ゆめのあと』(吉川本)³⁹⁾も七面宮の項で「境内哥舞妓・見セ物・手まりの曲など有、宝前二役者・子供の挑灯数多、中にも久きくが懸たる長キ六尺餘りの箱挑灯一對ハいさぎよしの評判」と記しており、ここからも妙善寺境内の盛り場としての賑わいが窺えよう。

橘町など名古屋城下南部の寺院境内において芝居興行が行われ、一帯に盛り場が形成されていたことは「享元絵巻」、『ゆめのあと』⁴⁰⁾、『事始』および同続篇、『尾張名所圖會』などからも窺うことができる。ただ、これは単に寺院の経営上の問題にとどまらない意味を有し

ていた。このことを『尾陽戯場事始』に見られる「今の世の芝居」のはじまりについての言説から考えてみたい。

- ⑥ 尾張人物志曰、名古屋三左衛門、古渡村人也、幼名山三郎、(中略)、おりふし永禄年中の頃とかよ、出雲のお国といへる巫女に契りをこめ、ついに妹脊のかたらひをなせり、而後都北野に於て小舞を覚えたる女を集め、説経に合せ舞せけるが、(中略)、此道次第に盛んになり、段々と連続せり、夫より三代目の孫娘お国といへるを太夫となし、京五條川原に於て大芝居をせしと也、されば今の世の芝居といふものは、吾尾張なる国人の仕始めし事にて、当時三都の戯場繁昌せるも、全く山三が余沢なれば、吾国のみ此業に於ては他国に恥事なしといはんか、抑此道当国に興行せし始めを考ふるに、(中略)永禄四辛酉年愛知郡熱田磐峰山のほとりにて櫓をかまへ、かの元祖山三郎の古郷なればとて、一座残らず此地に引越し、二ヶ月あまりも勤之(後略)⁴¹⁾

ここでは尾張人の名古屋山三郎という人物が出雲阿国を妻として「今の世の芝居」、すなわち歌舞伎の創始者となったことが述べられている。これが史実としては誤りであることは既に考証から明らかになっているようだが、ここで重要なのはむしろ歌舞伎創始者を尾張人として描くことで尾張は芸能の面では三都をも凌いでいることを論じている点にある。

そしてまた注意されるべきは、尾張における芝居興行のはじまりが熱田とされている点である。ここで見える永禄4(1561)年という年は名古屋山三郎が生まれる前にあたり、該当する記録も見えないことからこれも史実とは見なしがたい。しかし熱田は神宮の存在によって古くから芸能と関わりの深い場所だったのであり、山三郎の伝説もそのひとつの象徴的な表れであったと解釈できよう。また、寛永はじめ以来中絶状態になっていた尾張の芝居復活の端緒となったのは熱田の亀井道場(圓福寺)への芝居免許であった⁴²⁾という事実も、初期の芝居の中心が熱田にあったことを示すものといえる。

『事始』における芝居興行場所の記載を見ると、初期にしばしば見られた熱田の地名は次第に減っていき、特に徳川宗春の藩政期にあたる記事においては皆無である。むしろ、『事始』は名古屋における芝居の繁栄を描くことを目的としたものと考えられるため、記事が当時の尾張における芝居興行を網羅しているかについては留保が必要だが、少なくとも尾張における芝居の中心が熱田から名古屋へと移ったことは否定できないだろう。また一方で初期の記事においては熱田の存在が強調されていることを考えると、この『事始』は、熱田から名古屋への芝居の移行を描くことで名古屋の熱田に対する優位性を主張するという言説を形成していると言えるのではないか。

そう考えると、寛文期に藩主徳川光友が橘町を開設し、ここに芝居興行の免許を与えたこと、また享保期に徳川宗春が武士の芝居見物を許可した⁴³⁾ことは、単なる市街活性化策にとどまらず、芝居を介して熱田を名古屋に文化的に取り込むという意味があったことが分かる。そしてまた、芝居の全国的な性格、更にはその尾張起源伝説は、名古屋を単なる一地方城下町から三都にも匹敵する大都市へと成長させる上できわめて戦略的に重要だったのである。

5. むすびにかえて一名古屋と熱田ー

都市の形成時期において比較するならば、熱田は名古屋よりも先行していた。1520年代の熱田を描いた「享禄古図」(熱田神宮所蔵)には既に神宮を中心に町場が形成されているのを見ることができ、こ

の先行条件としての熱田の存在が清須からの遷府先として名古屋が選ばれる一因にもなったといわれる⁴⁴⁾。また、熱田と名古屋の別称をそれぞれ「蓬萊」、「蓬左」と呼ぶが、桐原千文氏によると「蓬左」とは「蓬萊宮」(＝熱田神宮)の左(左方、周辺)を意味するもので、これは「両者の位置関係とともに、近世初期の熱田の優位を示す呼称」として理解できるという⁴⁵⁾。それゆえ名古屋と熱田の間(＝名古屋南郊)に位置する村落は、本来前者よりも後者との結びつきの方が強固だったのである。そのことは以下に示す口碑に顕著に表れている。

- ⑦ 又古老伝て云、上古八今の名古屋ハ深山幽谷のみにして更に人家なし、其頃よりも此日置の郷二八人餘多住て工・商人もありし由、其時代ハ熱田・日置ハ一郷の様ニ而甚親深く、商人など行通ひたり、世に日置の熱田とさへ呼びし由口碑に残れり⁴⁶⁾

第3節で見たような、大原織太夫をはじめとする熱田社人の名古屋南郊への進出(＝諸社地の「扣」化による経済面・教線面での勢力拡大)はまさにこのような状況のもとで進展したと考えられる。

一方で17世紀後半以降、名古屋と熱田の両都市は互いに接近してきた。名古屋の側で寛文4(1664)年に本町通に沿って町屋開発が行われたことは既に述べたが、熱田の側でも同年に松並木の街道に熱田北端の町になる新尾頭町が開設されている⁴⁷⁾。更に享保13(1728)年には名古屋の周辺村落が「町続」として編入されることにより、名古屋と熱田とは地理的に接することとなるのである⁴⁸⁾。

こうして名古屋と熱田の一体化が進展していくが、それは全般に前者が後者を取り込むというかたちをとっていた。熱田社人大原織太夫の既得権益への妙善寺の侵蝕はその一例であるし、より顕著には尾張における芝居興行の中心が熱田から名古屋に移ったということにも表れているだろう。それは、熱田という全国的な重要性をもつ都市を取り込むことで、名古屋を城下町的(＝自己完結的)な同心円構造の枠組みを超えた、複合的な都市へと成長させようとする、藩側の都市戦略の結果でもあったのである。

このとき重要な役割を果たしたのが「南寺町」の存在である。本来城を中心とする同心円構造の周縁部におかれていた「南寺町」は、名古屋の南に接するもうひとつの都市である熱田の存在ゆえに、むしろ両都市の境界としての側面を強くしていく。そして寺院のもつ宗教的要素、また境内地という空間の存在は、熱田という都市(＝神宮、芸能)を媒介する上できわめて適格的だったのである。本稿で検討した妙善寺と熱田社人の関係、および境内地における芝居興行の事例は、その典型的な表れとして理解することができるのではないか。

謝辞 本稿は2002年3月に行われた、研究グループ「とらっど2」(科研・基盤研究(A)(2)伝統都市の社会＝空間構造と諸類型に関する基盤的研究)伊勢山田合宿における発表をもとに再構成したものである。発表の際には代表の吉田伸之先生をはじめ、メンバーの先生方から示唆に富む数々の御教示をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

註

- 1) 元禄6(1693)年から安永4(1775)年までの同寺の諸記録。以後、「諸事扣」と略す。『名古屋寺社記録集』(以後『記録集』と略す)巻43所収。
- 2) 名古屋城下の東部と南部にはそれぞれ寺社集中地区が存在し、一般にこれを「東寺町」・「南寺町」とよぶ。なお本稿では町名の南寺町(別名石切町)との混同を避けるため鍵括弧付きで表すこととする。
- 3) 炭志麻「近世城下町名古屋」の形成についてー遷府以前の様相とその都市建設の手法を中心にー(『年報都市史研究』4号、山川出版社、1996年)。

- p. 102.
- 4) 林董一氏によれば、名古屋の町人地は徴税主体の面から、(a)町役の賦課される「町中」、(b)諸役免除で寺社が租税徴収権を有する「寺社門前」、(c)国奉行に年貢を賦課される「町統」の3種に大別され、うち「御城下」に含まれるのは(a)・(b)で、(c)の町統は市街延長部として外部におかれていたという。林董一『尾張藩公法史の研究』、日本学術振興会、1962年、第4章参照。
 - 5) 樋口好古『那古野府城志』(寛政4(1792)年～文政5(1822)年編纂、『名古屋叢書』9巻、名古屋市教育委員会、1963年 所収)橘町の項に「寛文四辰十一月(朱書:塩尻には寛文二年壬寅と有)瑞龍公の台命に因て為町屋、橘町と号。古鉄・古道具等の商売を免許し玉ひ、即__公の証状永久重宝と崇めり」(p. 164)とある。
 - 6) 前掲『那古野府城志』橘町の項に「古為松原曰千本松原」(p. 164)と見える。
 - 7) 『尾張芝居雀』において「夕日物語」を引き、「寛文五年巳秋、橘町にて芝居初めて有之」との記述が見られる。小寺玉晃『尾張芝居雀』(『名古屋叢書』17巻、名古屋市教育委員会、1962年 所収)、p. 112参照。
 - 8) 『記録集』巻43、pp. 74-75。
 - 9) 「妙善寺歴代」(文政3(1820)年)、『記録集』巻43、p. 123。
 - 10) 『名古屋市史』社寺編、名古屋市、1915年を参照。
 - 11) 前掲『名古屋市史』社寺編、情妙寺の記事に「(延宝8年)七面堂を当寺新地末森山に建て」(pp. 916-917)とある。
 - 12) 前掲『那古野府城志』に「承応二癸巳年、茶屋長以請官創建之」(p. 244)とある。
 - 13) 前掲歴代住職記において三代日諒(=情妙寺四世)の項を見ると、彼もまた貞享2(1685)年に隠居後、元禄2(1689)年に妙善寺に入寺していることが分かる。
 - 14) 前掲「妙善寺歴代」、『記録集』巻43、p. 124。
 - 15) 「当寺建立次第」(享保13(1728)年、諸事扣所収)、『記録集』巻43、p. 36。
 - 16) 「請取申御材木之事」(元禄9(1696)年4月、諸事扣所収)、『記録集』巻43、p. 4。
 - 17) 「諸事扣」に「元禄十五年壬午千代姫様より白銀拾枚茶屋長以御願被申直二拝領被仕」(『記録集』巻43、p. 4)とある。
 - 18) 「諸事扣」、享保13(1728)年の茶屋長曾による寺社奉行所宛の奉加願書において、「一寺を取立候儀、長以自力二難叶、御城下町々・在辺共に間口割奉加之儀奉願候処、是又願之通御免被遊」(『記録集』巻43、p. 25)と見える。
 - 19) 「諸事扣」所収、『記録集』巻43、p. 7。
 - 20) 「正徳三癸巳年差上候家並帳之写」(「諸事扣」所収)は「先年は茶屋長曾扣屋敷二而御座候処、元禄六癸酉年被寄附、則其節御断申上、寺地二改申候」と、茶屋家からの寄附の年を元禄6(1693)年とする。『記録集』巻43、p. 9。
 - 21) 同上史料に「一、法華宗妙善寺 家持」という記載が見える。なお、後で見えるようにこの屋敷は日置八幡の社地にあたっており、妙善寺は日置八幡祠官の熱田社人、大原織太夫に年貢を納入していた。
 - 22) 「奉願候事」(正徳3(1713)年9月、諸事扣所収)、『記録集』巻43、pp. 13-14。
 - 23) 前掲「当寺建立次第」に、「庚申ノとし(引用者註:元禄13(1700)年)九月朔日二御領大納言様より掛り申候」とある。『記録集』巻43、p. 36。
 - 24) 下註引用の「一札之事」では240坪となっているが、ここでは安永3(1706)年の寺社奉行所への届け出の記載(「寺内坪数六百四坪 間口南北十二間、裏通二十八間、東西三十三間、北町裏十三間」、『記録集』巻43、p. 82)との整合性の点からも224坪としておく。
 - 25) 一札之事
一、金拾両者 本金也
右之金子は今度愛智郡日置村私扣八幡社地之内式百四拾坪、寺社御奉行所へ相達申上候而御借し申二付、右之地年貢老々々年二金壹両宛二相定、本金拾両只今請取、毎年々利金壹両宛を指次申第二相極申外衷正也。千一右之地入用之節ハ、拾両之本金何時二而も急度返并可申候。後々迄右之地御借申置候内ハ、右之拾両之金子預り置、外二申分無之候。為後日一札如件
正徳四年午十二月 大原曾七郎 在判
同 織太夫 在判
妙善寺殿 (「諸事扣」所収、『記録集』巻43、pp. 15-16。)
 - 26) ここで言う「扣」は、家屋敷の所持をさした史料③の場合と異なり、八幡社地に対する一種の地主権の保有をさすと思われる。「扣」についての詳しい検討は補註を参照のこと。
 - 27) 江戸中期以前成立とされる「熱田祠官祠掌私記」(「神道体系神社編19 熱田」、神道体系編纂会、1990年 所収)によると大原織太夫は「八剣宮附中麁之社家」として見える(p. 491)。
 - 28) 前掲『那古野府城志』に「一、社五ヶ所 覚書に、八幡・山王・白山権現・山神・神明社(中略)四社は熱田彌宜織太夫持、神明は親福寺持」(p. 109)とある。
 - 29) 前掲『那古野府城志』に「熱田彌宜大原織太夫持分」(p. 123)とある。また前掲『名古屋市史』社寺編によれば同村三輪社も大原織太夫が神職を奉仕していた(p. 284)という。
 - 30) この他にも『那古野府城志』を見ると名古屋新田村の八劍宮社は熱田彌

宜(栗田)理太夫の持分(p. 60)、古渡村八幡は熱田彌宜(栗田)勝太夫の持分(p. 137)とある。

- 31) 「諸事扣」所収、『記録集』巻43、pp. 54-55。
- 32) 「奉願候事」(享保13(1728)年2月、「諸事扣」所収)に「一、当寺七面大明神之堂并庫裏・客殿去夏類焼仕候二付、今度四間二五間之七面堂、五間二六間之客殿、五間二六間之庫裏、各附下シ、共二式間二式間之玄間造立仕度奉願候」(『記録集』巻43、p. 26)と見える。
- 33) 「奉願候事」(寛延3(1750)年、「諸事扣」所収)に「当寺庫裏・客殿今迄町家軒並二御座候付、常之火之元氣遺鋪奉存候。就夫旧冬奉願借り添地之儀相済申候間、鬼子母神堂建立仕候序二、火之元用心之為、庫裏・客殿とも二町並より裏江引候而、如元取建申度奉願候」と見える。
- 34) 「諸事扣」所収、『記録集』巻43、pp. 56-57。
- 35) この願書において妙善寺は直接大原らに打診する前に寺社奉行所の下役人衆の半田・小出に予め根回しを行っているが、このことから妙善寺の側が自らの要求の齟齬さを自覚しつつ、これを何とか通すための策を練っていることを窺うことができるだろう。
- 36) 前掲『名古屋市史』社寺編、pp. 251-252(日置神社)、pp. 927-929(妙善寺)。
- 37) 指峰堂忠兵衛編、高力種信画『尾陽戲場事始』(天明2(1782)年、三田村鳶魚校訂『未刊隨筆百種』第五、米山堂、1927年所収)、pp. 180-181。
- 38) 先述のように借添地は正徳3(1713)年と寛延2(1749)年の二度行われているが、後者は宗春失脚の余波で芝居興行が不振だった時期にあたり、『尾陽戲場事始続篇』(『名古屋叢書』17巻、名古屋市教育委員会、1962年 所収)にも「寛延二己巳年芝居なし」(p. 15)とあることから、これは前者の借添地を指すものと見るべきだろう。
- 39) 名古屋市史資料、名古屋市立鶴舞中央図書館所蔵。
- 40) 『遊女濃安都』(国会図書館本)、『夢之跡』(小寺本)、『夢農跡』(吉川本)、『夢の阿戸』(内田本)など異本多数あり。
- 41) 前掲『事始』、pp. 5-6。
- 42) 前掲『事始』に「吾名府には治右衛門が女歌舞伎興行の後は漸久敷中絶たりしを、明暦三酉年あたに御免しを蒙りて、八月廿四日より熱田亀井の道場の舞并若衆歌舞伎といふものを興行せり」(p. 16)とある。
- 43) 阿部直軸『尾藩世記』上(慶長5(1600)年から明治2(1869)年までの藩通史、『名古屋叢書三編』第2巻、名古屋市教育委員会、1987年 所収)、p. 331。
- 44) 茨前掲論文、p. 95。
- 45) 『新修名古屋市史』第4巻、名古屋市、1997年、p. 73。
- 46) 『名府所々開帳録』(文政期、名古屋市史資料、名古屋市立鶴舞中央図書館所蔵)、pp. 83-84。
- 47) 樋口好古『尾張御行記』(『名古屋叢書続編』4巻、名古屋市教育委員会、1964年 所収)、p. 203。
- 48) 前掲『新修名古屋市史』第4巻、p. 74。

補註 名古屋における「扣」概念について

本文でも見たように、名古屋における屋敷関係の史料には「扣(控)」或いは「扣(控)屋敷」なる用語が散見される。『日本国語大辞典』(第2版、小学館、2001年)は「控屋敷」の一般的な意味を「本邸のほか、必要に備えて設けておく屋敷」(第11巻、p. 147)と規定しているが、名古屋における用法も基本的にはこれと矛盾しない。例えば茶屋家扣屋敷が「下屋鋪」と言い換えられていることは本文で確認した通りであるし(茶屋家からの寄附後の屋敷を「妙善寺扣」と記載する例が皆無であることにも注意)、また『記録集』巻54に所収の「文化五年戊辰八月改 聖徳寺門前地子年貢扣帳留」は、名古屋城下の一向宗寺院である聖徳寺の門前について、一筆ごとに地借人に賦課する地子高を書き上げた史料であるが、ここでは「宅」と「扣」という用語の使い分けが認められ、これは屋敷所有が居宅目的か借家経営目的かの相違を意味するものと推測される。このことの傍証として、元材木町犬山屋神戸家文書(史料館所蔵)の町屋敷経営関係史料に「扣借屋」という記載が見えること(史料館渡辺浩一先生、東京大学史料編纂所宮崎勝美先生の御教示による)を指摘しておきたい。

「扣」の意味する権利関係は家作に限られたものではない。例えば「諸事扣」延享3(1746)年2月の寺社奉行所宛の願書に「愛智郡前津小林村之内始屋町二東西三拾式間式尺、反数二而老反六畝余御年貢地、当寺扣二罷在候」(p. 40)という一節が見えるが、ここで言う「扣」とは同寺の土地所有権の保有を意味するものと考えられるし、また本文史料④・⑤に見られる日置八幡社地の例では、「扣主」の大原織太夫が妙善寺から年貢を徴収しており、これは一種の領主権の保有を意味するものと理解できる。このように「扣」の語の表す権利関係は多様であるが、しかしこれらにおいても「本拠とは別に権利を保有するもの」という意味合いは共通であるように思われる。大原織太夫があくまで熱田社人であり、また彼が名古屋南郊において「持分」としていた社地は日置八幡だけではなかったという事実はそれをよく示す一例である。

以上見てきたように、「扣」は名古屋における屋敷地経営を検討する際の重要なキーワードと言える。今後はこの語の表す権利関係の多様性と重層性を具体的な事例を通して明らかにしていくことが求められるだろう。

(2002年8月21日原稿受理、2002年11月12日採用決定)